柊二遺文

宮柊二

柊二遺文

宮 柊二

立風書房

柊二遺文

昭和六十二年十二月五日印刷
昭和六十二年十二月十一日発行
著者＝宮　柊二
発行者＝下野　博
発行所＝株式会社立風書房
〒141　東京都品川区東五反田三―六―一八
電話＝〇三(四四七)一一九一（営業）
〇三(四四一)八二三一（出版部）
振替＝東京五―七四四九三
印刷所＝信毎書籍印刷株式会社
定価三二〇〇円
乱丁・落丁本は、直接小社通信販売部へお送りください。
小社送料負担でおとりかえいたします。
©H. Miya Printed in Japan 1987
無断複製（コピー）を禁ず。
ISBN4-651-60036-0

目次

I

ふるさとの鮎　一一
ふるさとを語る　一四
屋根の雪おろし　一六
よろんがし　二三
川を見る　二七

*

五平餅と漬け物と　二九
亡友の子　三一

網走の旅　三四
一枚の古葉書　三七
旅へのおもい　四一
Ⅱ
安き心になりたし　四四
入院記　四八
鯛の身　五二
「老い」とは　五六
老齢によろこび賜う　五九
五十年目のめぐりあい　六二
悲傷の抒情・孤独な哀感　六五
わたしの大切なもの　六八
不幸な偶然性　七二
葉書のうた　七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

みな黙したり　八六
愛に未熟な娘へ　八九
孫ふたり　九四
父と紺色のきもの　九七
蜻蛉の細きは母の魂か　一〇〇
*
書のこと　一〇八
数をよみこむ　一一
短歌の楽しみ　一一四
初いういしい感動　一一八
朝日新聞投稿歌壇　一二〇
まはれぶ桜　一二三
*
万葉と私――歌集『群鶏』のころ――　一二五

「コスモス」創刊号の歌など　一三五
「コスモス」の『神曲』連載について　一四〇
「コスモス」の三十年　一四五

Ⅲ

遊歩道　一五一
神田川遊歩道　一五七
霜降のころの草と花　一六一
六月六日　一六五
萬野家本「西行絵巻」の第三段　一六七
小鳥の来る朝　一七〇
ぶよの飛ぶ道　一七三
山鳩の声、椋鳥　一七六
春　雨――日本の美――　一八〇

*

ことば歳時記　一八三
＊
忘瓦亭備忘記　二〇二
Ⅳ
黄金の楊枝――白秋の想い出――　二五五
「城ケ島の雨」が作詞されたころ　二五九
新潟県と北原白秋　二六六
良寛の鞠　二七一
戦線より　二七五
＊
何も恐ろしいことはない――木俣　修――　二七八
思い出――大野誠夫――　二八一
＊
マイナーポエット――山本健吉――　二八四

山本さんのお叱り　二八九
白牡丹――加藤楸邨――　二九三
鳥雲に――悼・中村草田男――　二九八
V
若くかなしみ老いて苦しむ――自伝抄――　三〇五
あとがき（宮　英子）　三五一
初出紙誌一覧　三五三

柊二遺文

装幀・前川　直

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

ふるさとの鮎

人の顔のもうさだかには見えぬ時間となっていた。山際にはまだ薄青い空が残っていたが、その山裾の村はもう夜だった。すると、ひたひたと足音がして、門の石垣の所に人影があらわれた。その人は、よく来て下さった、と言って、手に提げていた草の苞(つと)を目の前で開いてみせた。茗荷の葉で包んだ鮎であった。旧暦の十五夜、つまり九月十五日である。もう落ち鮎の季節になろうとしているのだが、それだけに仔が育って、ふっくらとした腹を持ったその魚は、茗荷の葉の上で、いかにも香魚というにふさわしい清楚な、それでいて全く充足した姿態を月に照らされていた。「鮎は他の魚と違って生臭くないから」とその人は言った。

少年の記憶から書き出したが、『万葉集』にはアユ（鮎）、またはアユコ（鮎子）の語を含む歌が十一首ある。

松浦河河の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ（巻五・八五五）

隼人の瀬戸の磐も鮎走る芳野の滝になほ及かずけり（巻六・九六〇）

等。これにワカユ（若鮎）の三首を加えることが出来る。しかし、万葉の鮎からは鮎らしさを感じることはむつかしい。巻六の歌は「遥に芳野離宮を思ひ」と詞書がある。この歌の鮎はどうやら、動物食から植物食に変ったばかりの、小鮎のように思われる。「裳の裾濡れぬ」は、現代のどっぷり腰まで急流につかって竿をあやつる友釣りを見馴れた者からは、「ふざけなさるな」と言いたくなるほどの美的意匠だ。

この春、越後堀之内へ帰って、川土手がすっかり改修されて、幾何学的な赤土の肌を盛り上げているのに驚いた。往時、葦やいたどりの茂った向うを、蒼黒い梅雨の迅水が綯い合うようにして走っていた河原の樫の老樹の根方に尻をついて、ものを思った少年の日は、もう今の私にはない。いたずらに旧時を懐しむのははばかられる。それで赤い川土堤の向うの蒼黒いまでに澄んだ水の下を、無数の鮎の魚群の游泳していることをイメージに描くことは差支えない。

郷里の魚野川の鮎には、魚野川の水のにおいがついている。それは俗にアカという。水底の石に付いた苔や藻の類を嚙ることで身についたにおいだという。そうすれば、それぞれの川の鮎が、それぞれのにおいを持つであろうことも、また、私の少年時代の鮎と今の鮎のにおいとは違っているかも知れないと想像できる。また、このごろは、琵琶湖産の稚魚を運んで来て放流することも盛んに行われていると聞く。しかし産地はどこであっても、魚野川で育てば魚野川の鮎になるのだろう。

私は魚野川の岸で育った。魚野川の岸の里人は、魚野川の水の澄明さを、その川からとれる鮎を、

日本第一等の川だ魚だと誇って止まない。何しろ水の美しい川だ。その川が育てる鮎だ。長岡の中学校にいた頃、図書館で読んだ記憶がある。たぶん小林存翁の本だったと思うのだが、破間川(あぶるまがわ)の鮎と魚野川の鮎の違いが、図を付して説明してあった。もう詳しくは覚えていないが、これは両川の底の石の具合が違っていることから生じる変化ではなかろうか。二川は流速も違い、したがって底も違う。

破間川は会津境から只見線に沿って（本当は只見線の方が川に沿って）下って来、小出と堀之内の境で魚野川に合流する。この流域の人達は、破間の鮎は日本一だと言う。破間は魚野川の支流だから、私が魚野川の鮎という時は破間川流域の人々の自慢をもかねるのである。しかし米自慢、女自慢のように、自分のところのものが、最上だと言い張りたいのが人情である。魚野川と破間川の鮎のうまさを論じあっていると、人あってまぜっかえして、「鮎は何々屋の鮎が一番うまい」と言う。その家は小出町にあって、魚野川に裏座敷を開いた魚屋兼料亭である。そこで新鮮な鮎を、焼いて喰わしてくれる。大きな囲炉裏に串を並べて、鮎自身の脂が身の内によく行き渡るように焼く。そうした鮎が一番おいしいと言うのである。あの清楚な、香魚といわれる魚の、「脂」という語に、私はどきっとする。そういう脂を、身内を流れて行き渡るように、無駄に外にこぼさぬように焼く、というのである。つくねんと囲炉裏の番をしているようなおっさんが、実は、鮎をうまくする大役を果たしているのか。

冒頭の落ち鮎、蕪村に句がある。天明三年の作、

鮎落ていよ〳〵高き尾上かな　　蕪村

これから、ふるさとも落ち鮎の季節に入る。

ふるさとを語る

人影がすくない町通りの午後、山から聞こえるカッコウの声に思わず佇んだ。

「寂しい」という感情を初めて抱いた。広い河原にヨロンガシという古木が立っていて、中が空洞で、入ると人間ひとりが隠れた。潜んで、穴から覗くと、魚野川の青い水が、日にきらめいて目の前を下っていた。そのときに抱いた感情が「恋」というものだったという気がする。

私の生まれた家は間口が三間（約五・四メートル）、奥行が十五間ほどで、二階にも四部屋があった。その二部屋に番頭さんが寝泊りした。その部屋にいって、番頭さんから冬の夜を本などを読んでもらっていると、雪の上をわたって夜中の川音が空から聞こえてくるのだった。

そうしたふるさとの家を離れて四十年が過ぎた。その家には今、従兄弟が住んで、私の父のころと同じく本屋を営んでいる。新潟県に用があると、用の日程を一日ほど遣りくって、ふるさとの家に寄る。従兄弟は私と同じ齢だから、話が合う。楽しい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com